

京阪神劇場連絡会企画シンポジウム

「劇場都市を考える」

日時 2005年7月27日(水) 13:15~17:15

場所 ツイン 21MID タワー20階 第4会議室

●パネリスト

大谷 燠 (Art Theatre db)

西田尚浩 ((財)京都市ユースサービス協会・東山青少年活動センター)

福島史子 (神戸アートビレッジセンター)

福本年雄 (ウイングフィールド)

丸山啓吾 (HEP HALL)

●ナビゲーター

丸井重樹 (精華小劇場)

●参加者 40名

劇場を運営したり、劇場で企画立案することが仕事の私たちにとって、街の中に劇場があることや、舞台芸術があることは、当然のことです。それはもちろん、街に住んでいる人たち、市民一般にとっても、必要不可欠なことだと考えています。しかし、果たして当の市民一般にとって、劇場や演劇は、無くてはならない存在なのでしょうか。

市民のみならず、行政や、企業、社会にとって劇場や演劇は、無くてはならない存在なのか。

「街に劇場は必要か」…あまりにも当然なこと過ぎて、その問いに対する明快なコトバを、私たちはこれまで持ち得なかったのではないだろうか。

「どうせ好きな人が好きなことやってるんでしょ」と思っている市民や企業や行政に対して、劇場が街に果たす役割、社会に必要不可欠な存在であることをアピールするためのコトバ。

シンポジウムでは、「街に劇場は必要だ」と声高に叫ぶのではなく、「劇場がないと困りますよ」と懇願するのでもなく、「街に劇場があると、こういう素敵なことがあります」と、劇場から街への“提案”を試みました。

まずは、各劇場が行っている事業を紹介していきました。

いまだ評価の定まっていない芸術家を支援する(裾野の拡大)、やがて全国・海外でも活

躍する芸術家を輩出する(育成)、また実験的・先駆的な舞台芸術を製作している事業など、舞台芸術の拠点としての劇場。そして、舞台芸術を街へ発信していく、芸術発信媒体(メディア)としての劇場。また、舞台芸術を社会とつなぐ、公共性のある場所としての劇場。それらの事業は、決して「好きな人が好きなこと」のためだけにやっているわけではないことがわかります。

芸術家が社会のためだけに活動を行うのは不健全です。しかしだからといって芸術家が社会に不必要なのではない。舞台芸術家と社会とをつなぐ場所が、劇場であり、つなぐ人が私たちです。

芸術家が教師や医者と同じように、街にいる。私たちはもっと、街に、社会に、舞台芸術の素晴らしさを“提案”するコトバを獲得しなければいけない。今回のシンポジウムをきっかけに、これからもそのことを考えていきたいと思います。